断される親が多いことがあきらかとなった。そのため、保健師は、現在の子どもの安全を確保することだけではなく、その親の育児力を査定して、育児力形成への目標を明確化しながら、育児力形成への支援を行っていた。主体的な育児を目指して、「自分で考えること」を常に推奨するとともに、「一緒に行うこと」、子どもとの関係作り等では「モデルを示すこと」などが行われていた。このような育児力育成への支援は、親の状態に合わせ、その家の状況、その家庭で大切と考えられている流儀を尊重することも重要である。

（7）虐待発生予防のための保健師活動に応用可能な生活支援の方策

文献を検討した結果、著書では保健以外の他領域分野かつ虐待発生後の支援方法について書かれているものがほとんどであったが、親・家族に対しての「ピアサポーター」的な視点、子どもに対しての「レジリエンス」の考え方、支援の方法・理論の知識と理解は保健師活動においても大切なことであり、虐待発生予防にも有効であると考えられた。原著論文からは、虐待発生予防に対しての具体的支援内容までは明らかとなっていないが、保健師は虐待対応の支援の中で「親の話を聞く」「理解や共感を示す」等をよく行っていた。これらは信頼関係の構築をめざし行われているものであった。信頼関係の構築は援助の基本とされているが、虐待をしてしまう親・養育者は信頼関係の構築が困難なことがあり、そこから虐待の発生・重度化につながることがあるため特に重要である。これらの原著論文における保健師のかかわりも虐待発生後への支援であるが、予防のためにかかわる際にも有効であると考えられる。

（8）保健師の生活支援上の課題とケース検討会の意義

ケース検討会では、事例の養育状況に影響する生育歴や家族の関係性についての情報収集が不十分で、なぜそのような育児がおこなわれているかの原因を探索することが十分できない状況があった。前述した虐待発生を予防していくためには必要な情報を集め、統合し全体像を描きながら判断を下すアセスメントプロセスが重要である。

検討会では、このプロセスが大切ということを、対象者の気持ちによりような支援も大切と伝えたことで、保健師が再度訪問等で状況を把握してみようという気持ちになった。虐待への移行可能性が高いと判断されるケースへの支援は複雑な要因が絡み合っていて、その背景を知り、効果的な支援をすることは一人で行うにはなかなか難しい現実がある。

検討会を行ったことで、状況の背景を知ることの重要性を認識したらこそ、すぐに成果として目に現れていないことに対して、意図を持って実践してみようとおもうことができたことは大きな変化であると考えられる。

また、職場内で検討会を行っても普段のしがらみから逃れられないため、自由に発言するということができない場合もあることが推察された。第3者の研究者が検討会がはいることで、職場内の関係性を解きほぐし、チームでケースを共有し協働してよりよい支援に結びつけていくための土壌づくり行っていると考えられた。

現在はまだ予定している検討会の初段階であり、効果的な継続的生活支援の方法については今後の結果を踏まえて考察していきたい。

5．研究発表

1）論文発表

なし

2）学会発表

○高城　智圭、金子　仁子、標　美奈子、増田　真也、宇井　恭子、三輪眞知子、江口晶子、岩清水　伴美、加藤　敦子、中島　健一郎、渡邊　輝美、保健師活動における乳幼児の虐待発生予防のための方策に関する研究―虐待発生予防のための生活支援に関する文献検討―、第11回日本地域看護学会学術集会（2008年7月発表予定）

○江口　晶子、三輪眞知子、玉水里美、岩清水伴美、金子仁子、標美奈子、宇井恭子、高城　智圭、渡邊　輝美、保健師活動における乳幼児の虐待発生予防のための生活支援―フォーカスグループインタビュー調査結果から―、第 11 回日本地域看護学会学術集会（2008年7月発表予定）

6．知的所有権の取得状況

なし

保健師活動における乳幼児の虐待発生予防のための方策に関する研究
—虐待発生予防のための生活支援に関する文献検討—

○高城　智圭[*1]、金子　仁子[*1]、標　美奈子[*1]、宇井　恭子[*1]、三輪　眞知子[*2]、江口　晶子[*2]、岩清水　伴美[*3]、玉水　里美[*4]、中島　健一朗[*5]、渡邊　輝美[*6]、
＊1慶應義塾大学看護医療学部、＊2浜松医科大学医学部看護学科、＊3静岡県西部児童相談所、＊4滋賀県立大学人間看護学部、＊5東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科、＊6静岡県立大学短期大学部看護学科

保健師による乳幼児の虐待発生予防活動の有効な方策を検討する際の一助とすることを目的に、著書および研究結果から生活支援の方法を整理した。虐待発生後に関する研究や他領域分野の支援方法が多く見られたが、それらの方法は虐待発生予防にも応用できると考えられ、その有効性の検討は今後の課題である。

【目的】虐待発生予防の視点からの保健師活動についての研究は少ない。そこで今回、保健師活動における支援方法を明らかにするために、保健分野に限らず他領域分野からも支援の内容・方法の示唆を得ることを目的にこれらの著書も対象とし、現在行われている支援方法を整理し、保健師による虐待発生予防活動の有効な方策を検討する際の一助とすることを目的とする。

【方法】1）著書について：Webcat Plusを用いて検索し、保健・心理・福祉分野の者による討論を行い、検討対象著書の抽出及び保健師活動に応用可能な方策について分析した。2）研究結果について：医学中央雑誌ver.4.0を用いて2007年12月に検索。1983年から2007年11月までに発表された文献のうち、キーワード「保健師＆子ども虐待」で原著論文24本のうち、保育士、研修評価等を除いた19本を検討対象とした。

【結果】著書について、キーワード検索した結果、「子ども（児童）＆虐待」579件、「子ども＆虐待＆福祉」198件、「子ども＆虐待＆心理」113件、「子ども＆虐待＆保健」52件、「子ども＆ケースワーク」135件、「子ども＆親子関係」135件が抽出され、これらのうち目次を照合し『生活支援』の視点が含まれる著書16冊を検討対象とした。16冊の著者の専門分野は、社会福祉学8、発達心理学3、臨床心理学1、医学2、保健1、社会学1、対象は虐待発生後を取り上げているものがほとんどであった。支援のキーワードは、親・家族に対して「ピアサポーター」「パートナーシップ」「OJT」「エコロジカルアプローチ」「Family Group conference（FGC）」「子ども家庭支援員」、子どもに対して「レジリエンス」、地域・社会に対して「ネットワーク」「見守りネットワーク」、支援の方法・理論として「家庭訪問」「解決志向アプローチ」「修復的愛着療法」「弁証法的思考法によるアセスメントプロセス」、支援者に必要なものとして「面接時のスキル」「コミュニケーション技術」「研修」「スーパーバイズ」等があげられた。諸外国の支援方策として、「ホームスタート」（英国）、「ヘッドスタート」（米国）があり、ピアサポーターの立場の者が家庭訪問を行い、親の相談・助言だけでなく親のロールモデルの役割を担っていた。

原著論文から『生活支援』『援助内容』について整理した結果、①援助の対象の多くは虐待発生後の家族に対して行われているものである②保健師による家庭訪問が生活支援において有効である③援助内容として「親の話をきく」「理解や共感を示す」「家事・育児の知識を教える」「家事・育児を一緒にする」「子どもの発達・安全を確認する」「サービスの紹介」「家族間の調整をする」「多機関との連絡・調整」等が保健師により行われている④虐待発生予防に関しては「妊娠中からの関わりの重要性」「保健師がハイリスク家族を気づく際の視点」が複数の研究で示唆されていた⑤援助のタイミング等援助方法の詳細は記述されたものがなく、その援助方法を選択した保健師の判断も述べられていなかった。

【考察】著書では、保健以外の他領域分野かつ虐待発生後の支援方法について書かれているものがほとんどであったが、親・家族に対しての「ピアサポーター」的な視点、子どもに対しての「レジリエンス」の考え方、支援の方法・理論の知識と理解は保健師活動においても大切なことであり、虐待発生予防にも有効であると考えられた。原著論文からは、虐待発生予防に対しての具体的支援内容までは明らかとなっていないが、保健師は虐待対応の支援の中で「親の話を聞く」「理解や共感を示す」等をよく行っていた。これらは信頼関係の構築をめざし行われているものであった。信頼関係の構築は援助の基本とされているが、虐待をしてしまう親・養育者は信頼関係の構築が困難なことがあり、そこから虐待の発生・重度化につながることがあるため特に重要である。これらの原著論文における保健師のかかわりも虐待発生後への支援であるが、予防のためにかかわる際にも有効であると考えられる。

今回の文献検討で示唆された援助内容の有効性の検討は今後の課題である。

尚、本研究は厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合）研究事業の助成を受けて行った一部である。

総括研究報告書資料２

保健師活動における乳幼児の虐待発生予防のための生活支援
―フォーカスグループインタビュー調査結果から―

○江口　晶子*1、三輪　眞知子*1、玉水　里美*2、岩清水　伴美*3、金子　仁子*4、標　美奈子*4、宇井　恭子*4、高城　智圭*4、渡邊　輝美*5
＊1 浜松医科大学医学部、＊2 滋賀県立大学人間看護学部、＊3 静岡県西部児童相談所、＊4 慶應義塾大学看護医療学部、＊5 静岡県立大学短期大学部看護学科

保健師が乳幼児虐待予防の視点から行う生活支援の構成要素として、[気懸かりを捉える]、[生活上の問題の見極め]、[支援の必要性の見極め]、[生活に適った支援方法の選択]、[生活に合わせた支援の実践]、[関わりのタイミングをはかる]、[意図的な関係づくり]が抽出され、生活支援の見極めとして生活の場で展開される家庭訪問の有用性が確認された。

【目的】

保健師活動において、乳幼児虐待ハイリスク家庭の発見から継続的に生活支援をしていく方策は明らかにされていない。そこで本研究では、保健師が乳幼児虐待発生予防の視点から行っている継続的な生活支援の内容を明らかにすることで、今後、保健師による虐待発生予防活動の効果的な方法を検討する際の一助とすることを目的とした。なお、「生活支援」とは、保健師が行う家庭での生活を成り立たせるための支援の方法とした。

【方法】

A県の2市に勤務する経験5年以上(平均経験年数11.7±7.1）の保健師6名を対象とした。2007年11月に、フォーカスグループインタビューを実施した。インタビュー時間は120分であった。研究協力者には、マルトリートメントのBイエローゾーンで、児童相談所の介入には至っていない要支援と判断されるケースへの保健師による支援について発言してもらった。収集したデータはKJ法の手法を取り入れて、複数の研究者で分析を行った。インタビュー内容から逐語録を作成し「生活支援」と関連する意味ある文節に区切り意味項目を抜き出し、研究の目的に沿って主題が明らかになるまで統合することで中位カテゴリー、上位カテゴリーを抽出した。なお、中位カテゴリーは「」、上位カテゴリーは［ ］で示す。

本研究は、慶応義塾大学看護医療学部研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

【結果】

分析の結果、132項目の意味項目から、38項目の中位カテゴリーと7項目の上位カテゴリーを抽出した。

保健師が乳幼児虐待予防の視点から行っている生活支援は、1. 支援の起点として、親子の発言や行動、態度、生活のありさま、家族の生活史などの観察から推し量ることで、対象の「育児の実情」、「思い」、「性格や物事の考え方」、「家族の弱点」、「矛盾」といった［気懸かりを捉える］ことをしていた。そして、2.「意図的に感度を高める」中で「生活と思いの実情を読み取る」、「気懸かりに生活を結びつける」、「生活のなかの親の困りごとを捉える」ことにより［問題の見極め］を行っていた。3. 保健師は[支援の必要性の見極め]にあたり「親の弱点」、「子どもに与える影響」、「支援の程度」をできるだけ「複数の視点」から捉えるとともに「親の示すニーズ」についても重視していた。4.［生活に適った支援方法の選択］では、「柔軟性」をもち「生活に密着した具体的な方策」を探り、「受入れのよさ」を重視していた。また、「特徴を踏まえた方策の組み合わせ」を行っていた。5.［生活に合わせた支援の実践］では、「糸口は顕在している困りごと」を中心に、「関わりの継続」によって「心の内を引き出す」、「親のロールモデル」や「実行可能な方策」を示し、「負担の実質的な軽減」、「生活のゆとり」、「育児を楽しむ」ことにつながる支援を行っていた。そして「消極的な見守り」の中で「主体的な支援の活用」や「弱点の対処」ができるようになると、虐待発生のリスクを差し当たり回避したと評価していた。6.［対象者に適った支援方法の選択］と［生活に合わせた支援の実践］に際し、「重篤性と緊急性」、「変化」、「根拠の共有」、「求められた時」を掴むことで、［関わりのタイミングをはかる］作業をしていた。7.［意図的な関係づくり］は、すべての生活支援につながっていた。保健師と親子との「できるだけ早い」、「あたりまえ」の「万遍ない顔つなぎ」、「援助者の保障」が必要であり、「積極的な関わりの継続」によって保健師が「安心できる援助者」となることが支援を継続、発展させていた。

【考察】

保健師は虐待の［気懸かりを捉える］と、今ここでの関わりを最大限に活用し［意図的な関係づくり］をすることで支援の糸口を探っていた。その後、親子の生活に焦点化し、問題を見極め、支援の必要性、選択、タイミングを図り、育児を乗り切るための支援を継続していた。

以上から保健師は、生活の中での親子の体験を共感的に理解した関わりをしながら、親子の家庭での生活をよりよいかたちで成り立たせていると考えられた。これらの関わりは虐待発生予防につながっていたことから、生活支援の見極めとして、生活の場で展開される家庭訪問の有用性が明らかになった。

データを追加し、保健師が生活支援のプロセスで行っている見極め、判断の根拠について検討することが今後の課題である。

なお、本研究は厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合）研究事業の助成を受けて行った一部である。

分担研究報告書

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））

保健師活動における乳幼児の虐待発生予防のための方策に関する研究
（主任研究者　金子仁子）

分担研究報告書

分担研究者　山田　和子（和歌山県立医科大学保健看護学部）

A．保健師の乳幼児虐待ハイリスク家庭の見極めと支援のための方策に関する研究

研究要旨

本研究は、虐待を起こす前に虐待のハイリスク家庭を早期発見し、保健師が支援するための基盤として親との信頼関係づくり、継続支援をしていくための方策を検討することを目的に、研究の初年度である本年は以下の３種類の基礎的な研究を行った。

Ⅰ．虐待を含む虐待周辺用語の定義に関する文献検討
Ⅱ．保健師の児童虐待の認識に関する調査
Ⅲ．保健師のハイリスク家庭の見極めと初期の支援方策に関する研究

Ⅰ．虐待を含む虐待周辺用語の定義に関する文献検討

目的：各種の虐待を含む虐待周辺用語が、使用され出した時期と定義の内容を明らかにすることを目的に、文献を検討した。

方法：13 の用語「マルトリートメント（不適切な関わり）・不適切な養育・不適切な育児・Children　in　need・虐待予備軍（群）・養育問題・養育困難・養育拒否・育児困難・ハイリスク因子養育者・ハイリスク家庭・気になる家族・虐待的（環境・育児・育児態度・行為）」を抽出し、これらの用語を用いている文献を医学中央雑誌から検索した文献を分析した。

結果：合計46本の文献のうち、子ども・養育者を対象にした症例検討の文献が最も多く、また、2000 年 5 月の虐待の防止法施行後に用語の多くが用いられていた。用語の定義が明確に記述されていたものは少なく7本であり、その他の文献の多くは、養育者・子どもの疾患や障害等、調査対象の状況で規定していた。虐待を現す用語は「マルトリートメント」「養育拒否」、虐待を含まない虐待周辺用語は「虐待予備軍（群）」「ハイリスク家庭」、その他の用語は、虐待と虐待周辺との境界が明確ではなく、虐待を含む虐待周辺用語として用いられていた。

まとめ：虐待周辺用語を用いる際には、様々に用いられている現状を関係者が認識した上で、認識の差異を埋めていく相互努力が必要であることが示唆された。

Ⅱ．保健師の児童虐待の認識に関する調査

目的：高橋らが開発した39項目から成るビネット調査の項目を用いて、保健師の虐待に関する認識の特徴を明らかにし、虐待の見極めについての検討の一助とすることを目的に行った。

対象及び方法：３府県とその管内の市町村に勤務する保健師で無記名による自記式質問紙を用いて行った。

結果：３県合わせた回収数は 212 人（回収率 79.1 %）で、属性の項目全てに回答している者を有効回答とし、194 人（有効回収率 72.4 %）を分析対象とした。虐待の認識が8割以上の項目は19項目あり、身体的虐待6項目、ネグレクト5項目、心理的虐待3項目、性的虐待5項目であった。虐待の認識が5割以下は7項目あり、ネグレクト4項目、心理的虐待2項目、性的虐待1項目であった。虐待に認識が低い項目は、保健師が日常的に関与することが少ない、性的虐待や年齢の大きい子どもの虐待の項目であった。

まとめ：保健師の虐待の認識の特徴を自覚し、虐待の見極めにおいてはその特徴をふまえ、慎重に行う必要がある。

Ⅲ．保健師の児童虐待を含むハイリスク家庭の見極めと初期の支援方策に関する研究

目的：「ハイリスク」の見極めと養育者との関係づくりの実態を明らかし、初期の支援について検討するの一助とすることを目的に行った。

対象と方法：３つの保健師のグループを対象にフォーカスグループインタビューの方法で行った。インタビューの内容は「ハイリスク」とは、「ハイリスク」を見極める時に考慮すること、「虐待」と「虐待を除くハイリスク」の違いなどについて聞いた。内容をテープに録音し、逐語録をおこし、KJ 法を用いて記述的に整理した。

結果：インタビューの結果、「ハイリスク」の育児内容、「ハイリスク」を判断するにあたって考慮していること、「ハイリスク」の観察ポイント、「ハイリスク」の判断、支援の目標、親の信頼を得るための方法、支援のポイントの項目が導き出された。

まとめ：ハイリスク家庭を判断する際の基準は、「普通」の育児であり、観察のポイントも、多くは日常生活の状況の観察であった。保健師は、育児支援を中心に、徐々に支援を展開するだけでなく、支援のタイミングを逃さない、親から連絡があった時にはすぐに訪問するなど親のニーズに素早く、かつ的確に応えることが、信頼関係を築くことにつながると考えられた。

３つの研究を系統的に行うことにより、虐待の定義、ハイリスクの定義、虐待の認識、初期の支援までの詳細が明らかになった。本研究で得られた知見を、今後作成する児童虐待支援のためにマニュアルに反映していきたい。

研究協力者
前馬　理恵（和歌山県立医科大学保健看護学部・専任講師）
岡本　光代（和歌山県立医科大学保健看護学部・助教）
三輪眞知子（浜松医科大学医学部看護学科）

はじめに

児童虐待（以下、「虐待」とする）対策の中で地域保健の役割は、被虐待児の発見、救出した後の保護、再発防止、子どもの心身の治療、親子関係の修復、長期のフォローアップ等、発見から長期のフォローアップまで幅広い役割が期待されている（社会保障審議会児童部会「児童虐待の防止等に関する専門委員会」報告書）。地域保健に幅広い役割が期待される背景には、これまで地域保健で培ってきた乳幼児健康診査、育児教室等の母子保健対策が全国的に整備され、機能しているためと考えられる。

特に、地域で生まれた全員を対象に実施している乳幼児健康診査を活用して、「虐待を含む乳幼児ハイリスク家庭」（以下、「ハイリスク」とする）の早期発見ができ、虐待の発生予防、あるいは虐待の初期の支援における地域保健の役割は大きい。

2000 年の児童虐待防止法の施行後、地域保健で働く保健師も虐待への支援経験が増加してきているが、「ハイリスク」の見極めと支援ための方策については未だ充分確立されていない。

そこで、「保健師の乳幼児虐待ハイリスク家庭の見極めと支援ための方策に関する研究」として、以下の３種類の基礎的な研究を行った。

Ⅰ．虐待を含む虐待周辺用語の定義に関する文献検討
Ⅱ．保健師の児童虐待の認識に関する調査
Ⅲ．保健師の児童虐待を含むハイリスク家庭の見極めと初期の支援方策に関する研究

A－Ⅰ．虐待を含む虐待周辺用語の定義に関する文献検討

1．目的

虐待についての定義は、2000 年 5 月に施行された児童虐待の防止等に関する法律によって明文化され、関係者の虐待に対する認識は統一されつつある。地域保健活動では、虐待を予防するために、虐待が起こっている家庭へ支援するだけでなく、虐待周辺の家庭に対して支援し、虐待へ移行することを防ぐ必要がある。しかし、虐待周辺の家庭を現す用語については、様々な名称や定義が用いられており、その捉え方は一様ではない。そこで、虐待を含む虐待周辺の家庭を現す用語（以下、「虐待周辺用語」という）とその定義が、いつからどのように用いられているかを明らかにすることを目的に、これまでの文献について検討した。

2．方法

これまでの文献で用いられている虐待周辺の家庭を現していると思われる用語を研究者間で検討した。そこで 13 の用語「マルトリートメント（不適切な関わり）・不適切な養育・不適切な育児・Children in need・虐待予備軍（群）・養育問題・養育困難・養育拒否・育児困難・ハイリスク因子養育者・ハイリスク家庭・気になる家族・虐待的（環境・育児・育児態度・行為）」を抽出し、これらの用語を用いている文献を分析した。

1983 年から 2007 年 10 月までに発表された国内・日本語文献を対象に医学中央雑誌 ver4.0 を用いて 2007 年 11 月に検索した。

検索項目は、前述の 13 の用語を 1 つずつ検索し、また、文献の種類を原著論文と総説に絞り、教育分野の文献は除外した。同じ定義を用いている複数の文献は、先に発表された文献を採用した。こうして抽出された 46 本の文献を分析対象とした。

3．結果

1）研究の概要

研究対象は子ども（乳幼児期～学童期）、養育者（父、母、祖父母）、関係者（医師、看護師、保健師、助産師、保育士、療育施設職員）に対して行われ、研究手法は、質問紙調査法、症例検討（介入検証も含む）、その他が用いられていた（表 A－1）。

表Ⅰ－1　研究の対象・手法

研究対象	研究手法	文献数（本）
子ども・養育者	症例検討	29
養育者	質問紙調査	9
関係者	質問紙調査	7
その他		1
合　計		46

2）研究結果の整理

（1）用語の種類

13 の虐待周辺用語のなかで、「ハイリスク因子養育者」と「ハイリスク家庭」は同義語で用いられていたため、2つを統一して「ハイリスク家庭」とし、12 用語に整理した。一番多く用いられていた用語は「育児困難」の 12 本、次いで「養育困難」6本、「養育問題」5本であった（表Ⅰ－2）。

（2）文献の調査対象

12 用語を用いた文献の研究調査対象を分析した。子・養育者を対象とした研究が 38 本、関係者を対象とした研究が 7 本、その他が 1 本であった。子・養育者を対象とした研究 38 本のうち、病院等に通院・入院している、あるいは母子生活支援施設に入所している等の事例を対象としているものが 27 本、一般の親子を対象としているものが 9 本、保健所や市町村で経過観察している事例や連絡協議会検討事例を対象としているものが 2 本であった。

（3）用語が用いられている時期

文献の発表年で、用語が用いられている時期を分析した。1990 ～ 1994 年が 5 本、1995 ～ 1999 年が 5 本、2000 ～ 2004 年が 19 本、2005 年以降が 17 本であり、2000 年以降の文献が 36 本あった。「養育困難」「養育問題」「育児困難」は法施行以前からも用いられているが、法施行により「マルトリートメント」「不適切な養育」「不適切な育児」「Children in need」「虐待予備軍（群）」「ハイリスク家庭」「気になる家族」の用語の多くが用いられるようになった（表Ⅰ－2）。

（4）用語の定義・説明と用いられ方

46 本の文献中、それぞれの用語がどのような用いられ方をしているかをまとめたものを表に整理した（表Ⅰ－3）。

その内定義が明確に記述されていたものは 7 本（15.2%）あった（表Ⅰ－4）。これらは、先行研究や海外の定義を引用しているもの、研究者自身が定義しているものがあった。定義が記述されていない論文の多くは、養育者・子どもの疾患や障害、家庭の問題といった調査対象の状況で規定していた。

「マルトリートメント」の 2 本 [6)26)]はいずれも虐待やネグレクトを包括する用語として統一して用いられていた。

「養育拒否」の 3 本 [3)24)25)]はいずれも、虐待（ネグレクト）として用いられていた。

「children in need」[27)]は「援助が必要な子ども」と定義され、虐待を含む周辺の用語として用いられていた。

「不適切な養育」の 1 本 [23)]は虐待に用いられ、2 本 [40)42)]は精神疾患をもつ母や家族の養育不能な虐待のリスクが高い状態として用いられていた。

「不適切な育児」の 1 本 [21)]は精神疾患を持つ母親の虐待事例で用いられ、2 本 [35)47)]

は不適切な育児の究極が虐待であると表現したり、様々な困難を抱えるＤＶの事例において、適切ではない育児行為として用いられていたが、虐待が含まれるかどうかは明確ではなかった。

「養育問題」の 1 本 [7]は超低出生体重児の背景にある虐待事例の養育問題を扱っているが、他の 4 本 [5)12)18)36)]は養育者や子どもに何らかの問題があって専門的介入を行っている事例において虐待の周辺として用いられていたが、虐待が含まれるかどうかは明確ではなかった。

「育児困難」の 2 本 [13)32)]は養育者の精神疾患、ＤＶ等によって暴力行為、ネグレクト等の虐待事例、あるいは協議会で虐待として報告された事例を検討したものに用いられていたが、他の 10 本 [2)8)10)14)15)17)20)22)43)46)]はすべて虐待の周辺用語として用いられていた。そのうち 3 本 [10)15)43)]は一般の健常な家庭において用いられていたが、残りの 7 本は養育者の精神疾患、子どもの発達障害や双子等を背景に何らかの問題があって専門的介入を行っている事例であったが、虐待が含まれるかどうかは明確ではなかった。

「虐待的（環境・育児・育児態度・行為）」の 4 本うち、「虐待的環境」[4]は家庭内の慢性および急性危機を背景に虐待を受けて育った環境として用いられているが、他の 3 本 [11)34)44)]は、虐待的傾向、育児困難感や育児不安感、一般の母親でも行う可能性のある不適切な養育、虐待類似行為といった虐待の周辺として用いられていたが、虐待が含まれるかどうかは明確ではなかった。

「養育困難」の 6 本 [1)9)19)29)31)39)]は、養育者の精神疾患や飛び込み分娩、医療的ケアが必要な子どもや育てにくい子ども等養育者や子どもに何らかの問題があって専門的介入を行っているものであり、虐待の周辺として用いられていたが、これらの事例は虐待であるかどうかは明確ではなかった。

「気になる家族」[38]は、保健師が母子保健活動において、虐待を心配される家族をどのように把握しているかを研究しているもので、養育者、子ども、近隣住民、関係者から情報を得て、保健師が「気になる」家族を虐待予防の観点で、虐待の周辺として用いられていたが、虐待が含まれるかどうかは明確ではなかった。

「虐待予備軍（群）」の 3 本 [28)30)41)]はいずれも虐待ではないが、虐待しそうな、虐待になりかねない、ハイリスクな養育者として虐待とは区別して用いられていた。

「ハイリスク家庭」の 3 本 [16)33)37)]はいずれも、若年妊婦や飛び込み分娩、養育者の精神疾患等養育者の背景の問題を扱い、虐待につながる可能性のある家庭として、虐待とは区別して用いられていた。

（5）虐待との関連

それぞれの用語は、虐待とどのように関連して用いられているか分析し、虐待事例を取り扱う等明らかに虐待として用いている文献を「虐待」、それ以外の虐待の周辺（リスク、背景）として用いている文献を「周辺」として分類した。「周辺」には虐待も含めて用いている文献もあったが、境界が不明瞭であったため、この類の文献は「周辺」に含めた。（表Ｉ－3）。

どの文献においても「虐待」として用いられていた用語は「マルトリートメント」「養育拒否」であった。また、文献によって「虐待」と「周辺」のどちらにも用いられている用語は、「不適切な養育」「不適切な育児」「養育問題」「育児困難」「虐待的」であった。どの文献においても「周辺」として用いられていた用語は、「children in need」「虐待予備軍（群）」「養育困難」「ハイリスク家庭」「気になる家族」であり、その中でも「虐待予備軍（群）」と「ハイリスク家庭」は明らかに虐待を含まない虐待周辺用語として用いられていた。

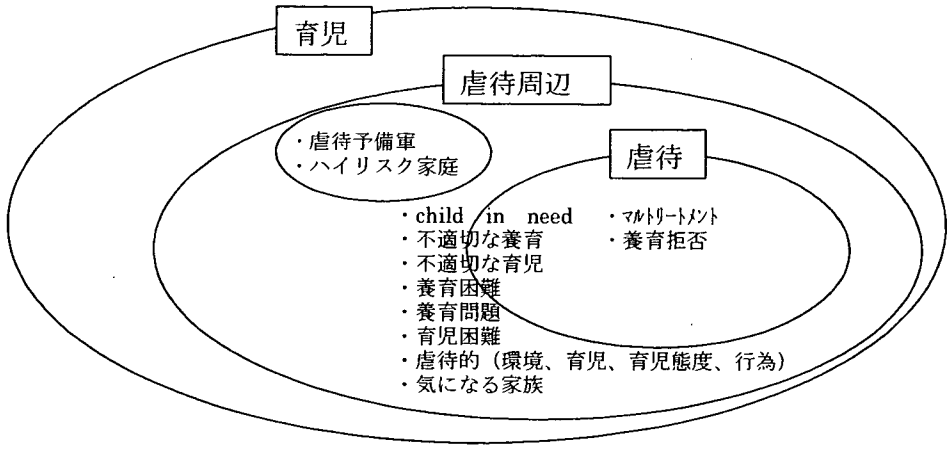
4．考察

今回 12 の虐待周辺用語について分析したが、研究者によって様々に虐待周辺用語が用いられていることが分かった。

調査の時期については、2000 年以降の文献が 36 本（78.3%）と最も多く、これは、2000 年 5 月に児童虐待の防止等に関する法律が施行され、その後に多くの研究がなされ、様々な虐待周辺用語が用いられるようになったと考えられる。特に育児困難については法施行前からも用いられていたが、法施行後、虐待ではないが育児困難状態にある虐待リスクの高い養育者に対する虐待予防の必要性が高まって、研究数も増加したと考えられる。

虐待周辺用語を、虐待との関係性で分析してまとめたものを図式化した（図Ｉ－1）。「虐待」として用いているものには「マルトリートメント」「養育拒否」のみであったが、いずれも先行研究や法で定義されている用語であるため、「虐待」として認識され、統一して用いることができている。しかし、それ以外の様々な用語については、研究者によって定義や説明がなされているが、その捉え方は多種多様となっていた。

このように、虐待周辺用語の多くは、不統一な用いられ方である。また、虐待周辺用語を、虐待として用いているものを「虐待」、虐待の背景やリスクとして用いているものを虐待「周辺」として分類したが、虐待と虐待を含まない虐待周辺の境界は不明確で、それを判断することも難しい。そのことにより、文献間の研究結果の比較が困難となるとともに、関係者間の虐待の認識に差異を生じ、虐待の早期発見や対応が遅れることにつながることが危惧される。今後、虐待周辺用語を用いる際には、用語の種類と用い方を十分考慮することが必要である。また、虐待の定義だけではなく、虐待周辺用語についても統一した用い方ができるように、定義を検討していくことが必要である。



図Ｉ－１　虐待を含む虐待周辺用語関連図

５．結語

国内の保健・福祉・医療関係文献の分析により、虐待を含む虐待周辺用語について、「虐待」と「周辺」とに分類し、これまでの文献でどのように用いられているかを分析した。今後の研究や実践活動において、研究対象の年齢、不適切な養育の程度や状況により、虐待の周辺の判断は容易ではなく、用語を統一して用いることは困難な状況にある。しかし、用語を用いる際には、様々に用いられている現状を関係者が認識した上で、認識の差異をうめていく相互努力が必要であることが示唆された。

文献

1) 浜田庸子：乳幼児表情写真（Ｉ　FEEL　Picture）に対する精神分裂病女性患者の情緒反応に関する研究，慶應医学，67(6)：1051 － 1065，1990
2) 真野典子，大月則子，山崎栄子，他：育児困難に陥っている母親と子への援助に関する研究，大阪府立公衆衛生研究所研究報告(精神衛生編)，30：1 － 5，1992
3) 本田景子，村田由美子，近藤貞子：母親の養育拒否による行動異常を示した患児への援助，小児看護，15(13)：1683 － 1689，1992
4) 岡本正子：児童虐待に関する研究　児童精神科病棟入院事例 20 例の検討，大阪府立公衆衛生研究所研究報告(精神衛生編)，　31：21 － 36，1993
5) 岡本伸彦，安枝敦子，中西眞弓，他：超未熟児の養育問題と地域母子保健，小児科臨床，47：99 － 104，1994
6) 高橋重宏，庄司順一，中谷茂一，他：「子どもへの不適切な関わり（マルトリートメント)」のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究（３）－子ども虐待に関する多職種間のビネット調査の比較を中心に－，日本総合愛育研究所紀要，33：127 － 141，1997
7) 山口和子，折井由美子，松田幸子，他：超低出生体重児の養育問題－学齢期総合検診より－，大阪府立母子医療センター雑誌，13(1)：29 － 32，1997
8) 堤啓：育児困難を主訴とした１０症例の治療経過，九州神経精神医学，44(3~4)：242 － 251，1998

9) 竹内浩視：気管支喘息の管理困難と不登校を主訴とした注意欠陥及び破壊的行動障害の1男子例―養育困難の視点からみた検討―，子どもの心とからだ，8(2)：141 － 149，1999
10) 妹尾栄一，大原美知子，萱間真美，他：【いじめという人間関係】一般人口における児童虐待の実態－家族環境とのかかわり－，アディクションと家族，16(4)：459 － 469，1999
11) 森下典子，山田重行，福島富士子：虐待的な育児の世代伝播とアダルト・チルドレン，母性衛生，41(1)：69 － 75，2000
12) 福本恵：【子どもの虐待】子どもの虐待防止のためのハイリスク要因等実態調査－母子保健調査－，地域保健，32(6)：60 － 81，2001
13) 古荘純一，安井満里子，水谷佳世，他：小児科日常診療における虐待の予防、早期発見に関する検討　両親の育児困難に対する連携診療について，小児の精神と神経，41(4)：261 － 267，2001
14) 水谷佳世，古荘純一，齊藤修，他：Shaken baby syndrome の2症例における診断・連携診療に関する検討，小児の脳神経，26(5)：390 － 393，2001
15) 田野稔郎，高橋雄一，森田秀子：育児不安・困難に関する幼稚園児の母親へのアンケート調査，神奈川県精神医学会誌，51：57 － 62，2001
16) 中尾幸子，山田裕美，岩永信子，他：周産期におけるハイリスク家庭の把握と継続援助の実態，子どもの虐待とネグレクト，3(2)：304 － 312，2001
17) 植田聡美，橋口浩志，徳丸潤，他：育児困難を訴えた母親への支援，九州神経精神医学，48(1)，40 － 46，2002
18) 宮本知子，飯島純夫：山梨県における市町村乳幼児健康診査の実態－養育問題把握の場としての視点から－，山梨医科大学紀要，19：107 － 112，2002
19) 寺口美香：なぜこどもに在宅医療が必要なのか、在宅に向けての病棟看護師の役割－養育困難と考えられたケースを通して－，こども医療センター医学誌，31(4)：232 － 234，2002
20) 浅井朋子，杉山登志郎，海野千畝子，他：育児支援外来を受診した児童 79 人の臨床的検討，小児の精神と神経，42(4)：293 － 299，2002
21) 五月女友美子，中條綾，松山健，他：虐待を否認する母親から法的手段で分離保護した2歳男児例，小児科臨床，56(7)：1619 － 1622，2003
22) 古荘純一，久場川哲二，久江洋企，他：児童虐待防止（特に育児不安について）：小児科と精神科の連携－第1報　症例を通しての検討－，小児科臨床，56(9)：1927 － 1931，2003
23) 石川丹：生涯教育シリーズメンタルヘルスケア　メンタルヘルスにおける最近のトピックス　－乳幼児虐待－，北海道医報，1024：36 － 38，2004
24) 島田裕子，富田美幸，青木みつ江：こども福祉医療センターの被虐待児の現状と今後の課題，茨城県立病院医学雑誌，21(4)：247 － 250，2004
25) 橋本卓史，星野恭子，麻生敬子，他：過去 20 年間に当院で経験した被虐待児 50

例の臨床像と転帰，日本小児科学会雑誌，108(6)：864 − 869，2004
26) 沖潤一：低身長児の対人関係と QOL に関する研究，成長科学協会研究年報，27：67 − 77，2004
27) 柳川敏彦，北野尚美，森谷美和，他：医療機関における Children in need の支援体制，子どもの虐待とネグレクト，6(2)：232 − 237，2004
28) 株田千恵子，鮎貝志織，小澤武司：戸塚地域療育センターにおける虐待予防に対する取り組み，リハビリテーション研究紀要，(14)：21 − 25，2004
29) 本澤志方，古庄知己，森和広，他：周産期医療施設における養育困難家庭への支援と介入の試みに関する現状と課題，日本小児科学会雑誌，108(11)：1398 − 1403，2004
30) 今村淳子：虐待予防の視点でとらえた母子保健活動の課題－保健センターで経過観察した親子症例の調査より－，小児保健研究，64(3)：493 − 498，2005
31) 井上玲子，小林隆児，島田雅子，他：養育困難事例にみられる関係性の内実と関係支援，東海大学健康科学部紀要，10：69 − 70，2005
32) 福田光成，高橋龍太郎，青井努，他：今治市における子ども虐待への組織的対応の現状，日本小児科学会雑誌，109(3)：381 − 386，2005
33) 二宮恒夫：窓口の一本化により機能的連携をめざす病院内虐待対策，子どもの虐待とネグレクト，7(1)：66 − 74，2005
34) 黒澤礼子，田上不二夫：母親の虐待的育児態度に影響する要因の検討，カウンセリング研究，38(2)：89 − 97，2005
35) 小泉武宣：NICU と虐待予防－不適切な育児を避けるには－，小児科臨床，58(8)：1649 − 1622，2005
36) 宮本知子，伊達久美子，飯島純夫：市町村保健師の乳幼児健康診査における養育問題把握方法と内容，小児保健研究，65(2)：322 − 330，2006
37) 板倉敬乃，羽鳥雅之，峯真人，他：埼玉県内の医療機関における児童虐待に関する実態調査，小児保健研究，65(2)：344 − 347，2006
38) 頭川典子：市町村保健師による子ども虐待発生予防の実態と今後の課題，日本地域看護学会誌，8(2)：73 − 78，2006
39) 後藤智子，小林益江，濱田維子，他：福岡県内における飛び込み分娩の実態，母性衛生，47(1)：197 − 204，2006
40) 原田路可，坂本理美子，山田知子，他：周産期からの子ども虐待防止継続支援体制，子どもの虐待とネグレクト，8(1)：107 − 113，2006
41) 神原文子："虐待予備軍″である保護者の実態と子育て支援の課題，子どもの虐待とネグレクト，8(1)：60 − 71，2006
42) 花田裕子，本田純久，小野ミツ：潜在的児童虐待リスクスクリーニング尺度作成についての検討，子どもの虐待とネグレクト，8(2)：247 − 257，2006
43) 西原玲子，服部律子，小林葉子，他：母親の育児不安と双生児の精神運動発達との関連性の検討－双生児と単胎出生児との比較から－，日本公衆衛生雑誌，53(11)

：831 － 841，2006
44) 中谷奈美子，本城秀次，村瀬聡美，他：母親の防衛スタイルと虐待的行為の関係，心理臨床学研究，24(6)：675 － 686，2007
45) 相川祐里，吉田敬子：育児困難感から子どもへの虐待が危惧される出産後の母親に対するグループワークの試み－「Attachment Style Interview」を応用して－，子どもの虐待とネグレクト，9(2)：202 － 212，2007
46) 大原美知子，妹尾栄一，今野裕之，他：母子生活支援施設に入所中の母親支援の検討　抑うつとの関連，厚生の指標，54(10)：7 － 14，2007

表 A-Ⅰ-2 虐待周辺用語の種類と用いられ方

	用語	文献数	虐待との関係		調査対象			調査方法			論文発表年			
			虐待	周辺	子・養育者	関係者	その他	症例検討	質問紙調査	その他	1990～1994	1995～1999	2000～2004	2005～
1	マルトリートメント	2	2		1	1		1	1			1	1	
2	養育拒否	3	3		3			3			1		2	
3	Children in need	1		1	1			1					1	
4	不適切な養育	3	1	2	3			2	1				1	2
5	不適切な育児	3	1	2	2		1	1	1	1			1	2
6	養育問題	5	1	4	3	2		3	2		1	1	2	1
7	育児困難	12	2	10	12			9	3		1	2	6	3
8	虐待的(環境、育児、育児態度、行為)	4	1	3	4			1	3		1		1	2
9	養育困難	6		6	5	1		5	1		1	1	2	2
10	虐待予備軍(群)	3		3	3	0		1	2				1	2
11	ハイリスク家庭	3		3	2	1		2	1				1	2
12	気になる家族	1		1		1			1					1
	合計	46	11	35	39	6	1	29	16	1	5	5	19	17

2000.5月
児童虐待の防止等に関する法律制定

表 A-I-3-1

虐待周辺用語を用いた文献

整理番号	検索語	論文名	著者・研究者	所属	論文種類	論文発表年	月	語句の定義や説明	研究の目的	語句の用いられ方	調査対象		調査方法	文献番号
1	養育困難	乳幼児表情写真(I FEEL Picture)に対する精神分裂病女性患者の情緒反応に関する研究	浜田庸子	慶應義塾大学医学部精神神経科学教室	原著論文	1990	11	精神分裂病女性患者は、精神分裂病の精神病理、社会経済的な環境の悪さ等の要素が関与し、自分で育てていない、子どもの事故、虐待の危険がある等の養育上の問題が認められている。	精神分裂病女性患者の I FELL testに対する回答を、精神的に健康な年齢をマッチさせた対象群と比較検討している。また、分裂病女性患者の情緒応答性と児の養育との関係を考察している。	周辺	子どもと養育者	精神分裂病の女性患者	症例検討	12
2	育児困難	育児困難に陥っている母親と子への援助に関する研究	真野典子他	大阪府立公衆衛生研究所精神衛生部児童精神衛生科	原著論文	1992	9	神経症及びその周辺にある母親の子育てによって、子どもの発育発達にネガティブな影響を受けている状態を育児困難とし、虐待、虐待予備軍と捉えることが可能な対象である。	育児困難に陥っている母親と子に対して受容的な集団での援助とTA(Transactional Analysis)理論による個別援助を行った症例について分析しTAアプローチの有効性を検討している。	周辺	子どもと養育者	神経症及びその周辺にある母親とその不適切な対応によって発達発育上にネガティブな影響を受けている症例	症例検討	52
3	養育拒否	母親の養育拒否による行動異常を示した患児への援助	本田景子他	福岡大学病院小児科	原著論文	1992	12	親の児に対する拒否的な態度により児への発育発達への影響がある状況を養育拒否とし、ネグレクトの事例を検討している。	発育障害および発達遅滞を主訴に入院した行動異常を示す患児に対して、生活環境を整え、年齢相当の生活体験を重ねる等の看護を振り返り考察している。	虐待	子どもと養育者	小児病棟入院の児	症例検討	15
4	虐待的環境	児童虐待に関する研究 児童精神科病棟入院事例20例の検討	岡本正子	大阪府立公衆衛生研究所	原著論文	1993	9	親と子ども、家庭内の慢性及び急性危機を背景に、虐待を受けて育った環境という意味で用いられている。	児童精神科医療施設に入院した虐待事例の実態と虐待の危険因子について分析し、子どもの心身発達に及ぼす虐待の長期的影響について考察している。	虐待	子どもと養育者	児童精神科医療施設に入院した児童虐待事例	症例検討	58
5	養育問題	超未熟児の養育問題と地域母子保健	岡本伸彦他	大阪府立母子センター成長発達科	原著論文	1994	8	超未熟児の背景にある、育児不安、関わりが少ない、極端な養育、育児過誤等を養育問題としている。	退院後の超未熟児親子の関わりの問題を分析し、地域母子保健の対応について検討している。	周辺	子どもと養育者	母子医療センターで出生しNICUを生存退院した超未熟児	症例検討	24
6	マルトリートメント	「子どもへの不適切な関わり(マルトリートメント)」のアセスメント基準とその社会的対応に関する研究(3)－子ども虐待に関する多職種間のビネット調査の比較を中心に－	高橋重宏他	日本総合愛育研究所児童家庭福祉研究部	原著論文	1997	3	「子どもの虐待」に代わる概念として「子どもへの不適切な関わり(マルトリートメント)」を用いている。不適切な関わりを上位概念として、下位に「虐待」「ネグレクト【不適切な保護・養育、無関心・怠慢】」「心理的に不適切な関わり」を位置させ、「虐待」が指す内容を身体的虐待と性的虐待という狭義の虐待としている。	過去2年間のプロジェクト研究の成果を踏まえサービスシステム構築の足がかりとして、専門職種間の不適切な関わりへの認識の差異を明らかにし、チームアプローチに関する議論を展開する基礎データを得ている。	虐待	関係者	児童相談所職員、保育所職員、看護師、保健師、医師	質問紙調査	30
7	養育問題	超低出生体重児の養育問題－学齢期総合検診より－	山口和子他	大阪府立母子センター企画調査部地域保健室	原著論文	1997	10	超低出生体重児の背景にある望まぬ妊娠・若年初産・未婚・経済的不安・夫婦不和等社会的問題から発生する育児過誤・小児虐待を養育問題としている。	超低出生体重児の虐待事例の養育問題を分析し、医療・保健・福祉の連携の重要性について明らかにしている。	虐待	子どもと養育者	母子医療センターで超低出生体重児で出産した児の学齢期総合健診の対象児の虐待事例	症例検討	22
8	育児困難	育児困難を主訴とした10症例の治療経過	堤啓	福岡大学医学部精神医学教室	原著論文／症例報告	1998	12	不安障害か軽度うつ病エピソードの病態を示した母親の、子どもと向き合えない、不本意ながら子どもにあたってしまう状態を育児困難としている。	育児困難を訴えて大学病院精神科外来で長期にわたり治療した症例の、背景、成因、治療と転帰について分析している。	周辺	子どもと養育者	精神科外来で治療した症例	症例検討	51
9	養育困難	気管支喘息の管理困難と不登校を主訴とした注意欠陥及び破壊的行動障害の1男子例－養育困難の視点からみた検討－	竹内浩視	国立療養所天竜病院小児科	原著論文／症例報告	1999	12	気管支喘息管理困難と不登校、発達障害を持つ患児側、核家族、共働き、相談相手がいない等の養育者側の要因とが相互に影響して、養育困難となっている家庭を調査対象としている。	管理困難な小児慢性疾患児に隠れた発達障害に対する、患児側と養育者側の両者における養育困難の視点から見た早期対応の重要性について検討している。	周辺	子どもと養育者	小児病棟入院の児	症例検討	11
10	育児困難	【イジメという人間関係】一般人口における児童虐待の実態－家族環境とのかかわり－	妹尾栄一他	東京都精神医学総合研究所	原著論文／特集	1999	12	母親の実家での家族環境・親子関係の問題を背景に、子どもをたたく、大声で叱る、泣いても放っておく等を子育てにおける育児困難や虐待行為としている。	子どもに対する暴力や放置に関する一般人口での実態を把握し、そうした行動や養育上の問題のリスクファクターとなっている要因を多面的に検討している。	周辺	子どもと養育者	小学校入学以前の児童1人以上育てている母親	質問紙調査	50
11	虐待的な育児	虐待的な育児の世代伝播とアダルト・チルドレン	森下典子他	二葉看護学院	原著論文	2000	3	母親が虐待的に育てられた傾向が強いと子どもへの虐待的育児態度の傾向が強く、育児態度は世代伝播する。	3歳児健診参加の母親が、虐待的な育児の世代伝播の有無とアダルトチルドレンとの関連について把握し、アダルトチルドレンの世代伝播を断つことに役立つ知見を得ている。	周辺	子どもと養育者	保健所での3歳児健診に参加した母親	質問紙調査	57

注)語句の用いられ方の項目の、「虐待」は、明らかに虐待として用いられている文献、「周辺」は虐待を含む虐待の周辺(リスクや背景)として用いられている文献を指す。

表 A-I-3-2

整理番号	検索語	論文名	著者・研究者	所属	論文種類	論文発表年	月	語句の定義や説明	研究の目的	語句の用いられ方	調査対象		調査方法	文献番号
12	養育問題	【子どもの虐待】子どもの虐待防止のためのハイリスク要因等実態調査ー母子保健調査ー	福本恵	京都府立医科大学医療技術短期大学部	原著論文／特集	2001	7	育児に関わっている母親（父親）や子どもに何らかの問題があって、その家庭が育児困難状況にあると判断したものと規定している。	乳幼児保健活動の一環として、養育問題に関わっている保健所・市町村の取り組みの実態から、虐待防止のためのハイリスク要因を明らかにしている。	周辺	子どもと養育者	保健所で養育問題のために1年以上継続援助を行った6歳未満の乳幼児の事例	症例検討	21
13	育児困難	小児科日常診療における虐待の予防、早期発見に関する検討　両親の育児困難に対する連携診療について	古荘純一他	昭和大学医学部小児科学教室	原著論文	2001	9	両親の精神疾患、覚せい剤使用、DVを背景に子どもにミルクを与えない、暴力行為、医療を受けさせない等の状態を育児困難としている。	小児科に入院させ早期に医療連携を試みた極端な育児困難例について検討、報告している。	虐待	子どもと養育者	小児科を受診した児で育児困難が重大で、身体的虐待を含む症例	症例検討	49
14	育児困難	Shaken baby syndromeの2症例における診断・連携診療に関する検討	水谷佳世他	公立昭和病院小児科	原著論文／症例報告	2001	10	ゆさぶられっ子症候群例の親が育児に対して自信がない、子どもへの愛着がもてない、たたく等育児不可能な状態を育児困難としている。	ゆさぶられっ子症候群の症例から、育児困難や虐待を未然に防ぐための診断・治療・家族支援のあり方について検討、報告している。	周辺	子どもと養育者	小児科を受診したゆさぶられっ子症候群と診断された乳児の症例	症例検討	48
15	育児困難	育児不安・困難に関する幼稚園児の母親へのアンケート調査	田野稔郎他	小児療育相談センター（財団法人神奈川県児童医療福祉財団）	原著論文	2001	12	児童虐待までには至らないもので、苛々する、子どもに当たる、つねる、怒鳴る等を育児不安、育児困難としている。	健常であると考えられる幼稚園児の母親の育児状況と母親がその両親に対して持つ感情を分析し、これまでのハイリスク妊娠・分娩の母親を対象とした県有結果と比較検討を行うための基礎データを得ている。	周辺	子どもと養育者	幼稚園に在園する児童の母親	質問紙調査	47
16	ハイリスク家庭	周産期におけるハイリスク家庭の把握と継続援助の実態	中尾幸子他	岐阜県立岐阜病院産婦人科	原著論文	2001	12	若年妊婦や飛び込み分娩は虐待につながるという認識を持ち援助することが必要な家庭としている。	周産期におけるハイリスク家庭に対して行った虐待予防および養育支援に向けた援助の結果を報告している。	周辺	子どもと養育者	産婦人科病棟で出産したハイリスク家庭の母親、虐待が把握された乳児と母親	症例検討	33
17	育児困難	育児困難を訴えた母親への支援	植田聡美他	宮崎医科大学精神医学講座	原著論文	2002	4	抑うつ状態を呈する母親の、育児ストレス、子どもを叩く、家事育児が滞る等の状態を育児困難としている。	育児困難を訴えて外来受診し入院治療を行った症例を分析し、育児困難の背景や要因、援助方法について、医療現場で活動する臨床心理士の立場から考察している。	周辺	子どもと養育者	抑うつ状態を呈して精神科で入院治療を行った3症例	症例検討	37
18	養育問題	山梨県における市町村乳幼児健康診査の実態　養育問題把握の場としての視点から	宮本知子他	上九一色村役場	原著論文	2002	9	様々な養育上の問題の把握のきっかけとなる乳幼児健康診査の実際について調査しているが、具体的に養育上の問題については言及していない。	受診者のさまざまな問題把握のきっかけとなる乳幼児健康診査がどのように行われているか調査している。	周辺	関係者	市町村の乳幼児健診の企画運営に携わっている母子担当保健師	質問紙調査	20
19	養育困難	なぜこどもに在宅医療が必要なのか　在宅に向けての病棟看護師の役割ー養育困難と考えられたケースを通してー	寺口美香	神奈川県立こども医療センター	原著論文	2002	10	医療的ケアの必要な子どもの在宅ケアにおいて、母親の家事と育児の負担が大きいこと、父親の非協力性、子どもの病状の不安定性と在宅での医療的ケアが複数ある事例を養育困難と考えられている。	医療ケアを必要とする子どもが在宅ケアにスムーズに移行するために、入院から退院までを支援する病棟看護師の役割について検討している。	周辺	子どもと養育者	子ども医療センター入院の児	症例検討	10
20	育児困難	育児支援外来を受診した児童79人の臨床的検討	浅井朋子他	あいち小児保健医療総合センター	原著論文	2002	12	軽度発達障害の子どもの問題行動や育てにくさから育児不安や過度の体罰につながっているものを、育児困難としている。	子ども病院に育児困難を主訴に受診した症例を分析し、軽度発達障害と虐待の関連について検討している。	周辺	子どもと養育者	心療科育児支援外来を初診した児童	症例検討	45
21	不適切な育児	虐待を否認する母親から法的手段で分離保護した2歳男児例	五月女友美子他	公立福生病院小児科	原著論文／症例報告	2003	7	母親の精神疾患等から児を一人家内において数時間外出する、泣き止まない児をベビーカーに乗せ家の外に放置する等を不適切な育児としている。	DV、虐待のため法的手段をもって両親から子どもを分離した症例から、子どもの安全確保のための対応について検討している。	虐待	子どもと養育者	父母による虐待のある小児科に来院した症例	症例検討	36
22	育児困難	児童虐待防止（特に育児不安について）：小児科と精神科の連携（第1報）症例を通しての検討	古荘純一他	青山学院大学文学部教育学科	原著論文／症例報告	2003	9	精神神経科に受診した母親が、情緒不安定、育児に自信がない、子どもを叩く、家族機能が働いていない等の状態に陥っているものを育児困難としている。	育児困難を主訴に精神科に受診した母親の家庭・社会状況について分析し、虐待に対する臨床的視点として、子どもの視点と親の援助の必要性を明らかにしている。	周辺	子どもと養育者	精神神経科外来に「育児困難」を主訴に受診した女性	症例検討	44
23	不適切な養育	生涯教育シリーズメンタルヘルスケア　メンタルヘルスにおける最近のトピックス　乳幼児虐待	石川丹	札幌市児童福祉総合センター（児童相談所）	原著論文	2004	1	児童虐待とは、身体的虐待、心理的虐待、性的虐待、食事を与えない、風呂に入れないなどの不適切な養育や、家庭で育てられないため施設入所を希望するという養育拒否と説明している。	児童相談所受理ケースの被虐待乳幼児の児童票から、虐待者の生活歴、家庭状況、精神的経済的社会的問題、虐待理由と児の被害と回復状況等について分析・検討している。	虐待	子どもと養育者	受理ケースのうち60名の被虐待児	症例検討	3

表 A-I-3-3

整理番号	検索語	論文名	著者・研究者	所属	論文種類	論文発表年	月	語句の定義や説明	研究の目的	語句の用いられ方	調査対象		調査方法	文献番号
24	養育拒否	こども福祉医療センターの被虐待児の現状と今後の課題	島田裕子他	茨城県立こども福祉医療センター	原著論文	2004	3	被虐待児の親の特徴として養育拒否、両親離婚、両親失踪等を挙げている。	肢体不自由児施設の被虐待児と親の特徴を明らかにし、親子関係を修復するための支援について検討している。	虐待	子どもと養育者	こども福祉医療センターに入所した被虐待児	症例検討	13
25	養育拒否	過去20年間に当院で経験した被虐待児50例の臨床像と転帰	橋本卓史他	東邦大学医学部第1小児科学教室	原著論文	2004	6	虐待の種類として、身体的虐待、養育拒否・怠慢、心理的虐待、性的虐待を挙げている。	病院を受診した被虐待児の臨床像を明らかにし、救急外来を担う小児科医の役割、虐待に遭遇した場合の適切な対処法を検討している。	虐待	子どもと養育者	病院で児童虐待と診断された小児	症例検討	14
26	マルトリートメント	低身長児の対人関係とQOLに関する研究	沖潤一	旭川厚生病院	原著論文	2004	7	奥山の「子どもへのマルトリートメントの早期発見方法としての成長曲線の有用性」から抜粋し、虐待やネグレクトとして用いている。	NICUに入院し小学校に入学した超低出生体重児の精神・神経学的予後を検討し、発達予後と栄養状態の関連等について検討している。	虐待	子どもと養育者	病院に入院した症例	症例検討	29
27	Children in need	医療機関におけるChildren in need の支援体制	柳川敏彦他	和歌山県立医科大学保健看護学部	原著論文	2004	8	英国の児童法Children Act 1989で定義を用いている。援助がなければ健康や発達が達成あるいは維持できない可能性がある子どもとし、虐待やマルトリートメントも包含している。	地域の関係機関の連携により子どもの虐待を予防するために、医療機関において福祉ニーズの観点で援助が必要な子どもの把握と援助方法を検討している。	周辺	子どもと養育者	小児科病棟またはNICUに入院した児及び家族で連絡協議会で検討した援助が必要な事例	症例検討	27
28	虐待予備軍	戸塚地域療育センターにおける虐待予防に対する取り組み	株田千恵子他	戸塚地域療育センター	原著論文	2004	9	虐待しそうな親に対する予防的な支援が必要なケース	虐待および虐待予備軍の事例を通じて取り組んだ親支援のあり方や対策等を検討し報告している。	周辺	関係者	地域療育センターの通園部門の担任	質問紙調査	18
29	養育困難	周産期医療施設における養育困難家庭への支援と介入の試みに関する現状と課題	本澤志方他	さいたま市立病院周産期母子医療センター小児科	原著論文	2004	11	父母の疾患、経済的破綻、家庭崩壊、虐待の既往、養育意思や能力の欠如等のある事例を養育困難家庭としている。	新生児治療病棟における養育困難家庭への支援と介入の試みについて検討している。	周辺	子どもと養育者	周産期母子医療センター新生児治療病棟に入院した児の家族	症例検討	8
30	虐待予備群	虐待予防の視点でとらえた母子保健活動の課題－保健センターで経過観察した親子症例の調査より－	今村淳子	堺市北こどもリハビリテーションセンターもず診療所	原著論文	2005	2	虐待はないが育児負担が大きいと予想される家族全体の問題を認めた症例（養育環境群）、虐待や家族全体の問題は認めないが親が育児について強い不安を訴える症例（育児不安群）を虐待予備軍としている。	堺市東保健センターで経過観察した親子症例の把握と支援に関する分析を行い、虐待予防の視点から母子保健活動の課題について考察している。	周辺	子どもと養育者	保護者に虐待または虐待予備軍と考えられる養育上の問題を認めた、保健師経過観察症例	症例検討	60
31	養育困難	養育困難事例にみられる関係性の内実と関係支援	井上玲子他	東海大学健康科学部看護学科	原著論文／症例報告	2005	3	子どものもつ知覚過敏等の素質が母親の関わりにくさをもたらし、母親の不安感や焦燥感、うつ症状を引き出し関係障害が生じている養育困難事例が検討されている。	育てにくさをもつ子どもの個体要因（素質）と環境要因（養育者）の関係の困難さの内実と悪循環を断ち切るための関係支援について検討している。	周辺	子どもと養育者	大学設置のユニットで支援した母子	症例検討	5
32	育児困難	今治市における子ども虐待への組織的対応の現状	福田光成他	愛媛県立今治病院小児科・今治市児童虐待防止連絡協議会	原著論文	2005	3	父母自身の問題、経済的困窮、夫婦の不和や家庭の問題等を育児困難としている。	市虐待防止連絡協議会の4年間の活動をまとめ、虐待に対する組織的取り組みの現状とその有用性について検討している。	虐待	子どもと養育者	虐待として報告され、協議会で組織的な対応が検討された事例	症例検討	42
33	ハイリスク因子養育者	窓口の一本化により機能的連携をめざす病院内虐待対策	二宮恒夫	徳島大学医学部保健学科	原著論文	2005	4	連携による継続支援（1次予防）の必要な事例をハイリスク因子養育者とし、低出生体重児や多胎等の子どもの要因と望まぬ妊娠、夫婦不和、精神疾患、経済不安定等の養育者の要因からアセスメントシートを用いてアセスメントしている。	子どもの虐待及びDV対策委員会設置による病院内虐待対策の成果と課題について検討している。	周辺	子どもと養育者	病院内子どもの虐待及びDV対策委員会で検討された事例	症例検討	16
34	虐待的育児態度	母親の虐待的育児態度に影響する要因の検討	黒澤礼子他	東京都江戸川区子ども家庭支援センター	原著論文	2005	6	川井らの育児困難感尺度、吉田らの育児不安スクリーニング尺度、斉藤の児童虐待傾向尺度を参考に作成された「虐待的育児態度尺度」を使用し、母親の虐待的育児態度を見ている。	幼児をもつ一般の母親の虐待的育児態度に影響を与えている要因の、相互の関係および影響力を明らかにしている。	周辺	子どもと養育者	保育園児の母親	質問紙調査	55
35	不適切な育児	NICUと虐待予防　不適切な育児を避けるには	小泉武宣	群馬県立小児医療センター	総説	2005	8	子ども虐待は不適切な育児の究極であり、親子関係が破綻した究極の状態、家族の病理と説明している。	周産期医療における虐待発生予防と地域育児支援ネットワークの1部としての役割について述べている。	周辺	－	－	－	35